

第Ⅲ部

新人教師の奮闘記

「新人教師の奮闘記」掲載について

—第4回「法政大学若い教師の集い」開催に代えて—

法政大学教職課程センター市ヶ谷相談指導員 戸塚 吉彦

1 「法政大学若い教師の集い」開催の経緯

「法政大学若い教師の集い」は3年前に始まりました。当時、第1回目の開催に向け、3キャンパス共通メールで発信されたメールには、“法政大学教職課程センターより、卒業生の皆さんにお呼びかけです。

法政大学に教職課程センターが出来て5年が経ち、現在沢山の卒業生が教職に就いております。この度、この5年間に法政大学を卒業されて教職に就いた方々を対象に、初めての企画として「法政大学若い教師の集い」を行います。若い教師の皆さんで集まり、大学時代の思い出や今の仕事のやりがいや悩みなど、ざっくばらんに交流したいと思っております。”とあります。それまで法政大学にはなかった、教育現場で頑張っている卒業生の皆さんの横の繋がりを創りたいという趣旨で始まったのがこの集いです。

第3回の昨年度から、教職課程センター運営委員会における検討を経て、市ヶ谷教職課程センターが中心となり呼びかけと運営をすることになりました。2019年8月23日(金)の夕方、教職課程実習室を会場に開催することができました。

しかし、残念ながら、今年度の第4回「法政大学若い教師の集い」は教職課程センター運営委員会において、感染症対策により「ざっくばらんに交流」することはとても難しいと判断し、「中止」が決定されました。

2 「新人教師の奮闘記」掲載の経緯

次の文は、東京都内のある小学校の『学校だより』4月号に掲載されていた校長先生の文章です。

“感染の拡大は収まる気配がありません。始業式も迎えられぬまま、引き続きの休業措置を強いられることとなります。こどもたちのストレス、保護者の皆様の負担を慮るばかりです。「あたりまえ」のことを「あたりまえに行える」ことが、どんなに幸せなことか、こどもたちも、保護者の皆様も、教職員も、今、共通の思いでしょう。令和2年が明けたとき、昨今の社会情勢を誰が予測できたのでしょうか。”

この文にあるように、私たちは「あたりまえに行える」ことが「幸せ」だと、改めて実感させられたこの数ヶ月間でした。私たちの共通の思いを表現している

文章ですね。振り返れば、この春の卒業生は3月24日の卒業式を実施することができず、せっかくの晴れ着が寂しそうな一日でした。そして、緊張して迎えるはずだった4月1日の辞令交付式や研修は中止になり、学校には「子どもたちの姿が見えない」新規採用のスタートとなりました。

私は採用試験対策で、学生へのオンラインによる指導(Zoomによる個人面接練習や集団討論練習、メールによる論文添削)をする毎日の中で、「この事態の中、新人教師のみんな頑張れ！」と何度もエールを送っていました。

卒業生の何人かとメールのやり取りをすると、Aさんは、“現在も2週間後の予定すらわからない、先が見通せない日々が続きますが、何とかやっています。このような状況下でも、頼りになる先輩の先生方に恵まれたことが幸せです。”

Bさんは“6月に入り、分散登校という形にはなりますが、授業が開始致しました。生徒との関係づくりはまだまだこれからですが、先生方には色々気にかけていただき、少しずつ職場にも慣れてきました。初任研が思ったように進まず、不安も多い中ではありますが、毎日とても楽しいです。”

Cくんは、“岐阜県は6月の1週目から分散登校が始まり、やっと生活に慣れてきたところです。流動的なことが多いですが、なんとかしがみついている状態です。”

「先が見通せない」状況下でも、先輩教員からの指導を受けながら、一生懸命に奮闘している姿が伝わってきました。そこで、中止となった第4回「法政大学若い教師の集い」に代えて、「新人教師の奮闘記」の掲載を運営委員会に提案し了承をいただきました。

3 まとめ

今年度は、各地から寄せられた6名の「新人教師の奮闘記」をご覧いただき、次年度の第5回「法政大学若い教師の集い」への参加意欲を高めていただければ幸いです。

大変だけど充実した日々

塚原 咲
(埼玉県公立高校国語科教員)

1 はじめに

2019年度文学部日本文学科卒業の塚原です。

私は現在、埼玉県公立高校の国語科教員として勤めています。ご存知のように、今年度は新型コロナウイルス感染拡大を受けて、大変な教員生活の始まりとなりました。そうした中で、教員となり、半年経った私がどんな日々を送っているか、そしてどんなことを感じたかを、お話をさせていただきたいと思います。これから教員になる方、もしくは教員採用試験を控えている方に、少しでも参考になれば幸いです。

2 コロナ禍の学校

現在勤務している学校では、3月から5月までを休校とし、6月から分散登校という形で学校再開に踏み切りました。報道では、オンライン授業やリモート会議などが話題になっていましたが、公立の高校ではネット環境の設備が整っておらず、また、生徒側のネット設備に差があったため、オンラインでの授業などは行わず、課題を出すことで対応しました。一方で、生徒と連絡を取る手段としてGoogle classroomを導入し、現在も活用しています。また、課題の解説や教員からのメッセージなどを動画にしてYouTubeで公開しました。こうした方法で可能な限り生徒との繋がりを保っていますが、やはり生徒と長く顔を合わせないことには不安がいっぱいでした。

6月から登校が始まってからは、教室の消毒、マスクの着用、校内のゾーニング、健康観察などで感染拡大防止に努めていますが、生徒同士はやはり密な接触をしてしまうため、まだまだ課題は残っています。また、文化祭や修学旅行、体育祭などの行事も感染拡大防止の観点から中止や簡略化となりました。非常に残念なことですが、生徒たちは不満もあまり言わず、理解して制限された学校生活を送っています。そうした生徒の姿を見ると、落ち込んでばかりもいられないな、と思います。不自由を強いられる中でも何かできることはないかと教員みんなで模索する日々です。

3 新人教員として

そうしたコロナウイルスの影響を受け、私自身が学校の生活に慣れるのにも、かなりの時間を要しました。

初任者研修も所属校での代替研修となり、同期と顔を合わせることもできず、4月5月はかなり不安を感じていました。しかし、先生方に本当に親切にいただき、少しずつ不安な気持ちが軽減されていきました。6月に入り、本格的に学校生活が再開された後は、忙しい日々が続いていますが、充実した時間を過ごせていると感じています。とはいえ生徒との接し方、授業プリントの作り方、学校運営に関する考え、どれをとってもまだまだ先輩の先生方には全く及びません。特に授業では毎回生徒の反応をうかがいながら、「失敗したかな。」「説明がわかりにくかったかな。」と反省してばかりです。周りとの経験の差を痛感し、最初のころはかなり焦りを感じていましたが、今は先生方に教わりながら、一步一步成長していこうと思えるようになりました。指導教員が「毎日が初任者研修なんだよ。」とおっしゃっていましたが、本当にその通りだと思います。

4 さいごに

春から教員になるみなさんに僭越ながら2つ助言したいと思います。1つは今のうちに教材研究をしておくことです。教員は本当に時間がありません。まして新人教員のうちは何をすることも先輩方の倍以上時間がかかってしまいます。だからこそ、時間がある今のうちに教材研究をしておいてほしいと思います。2つ目は、感謝の気持ちをしっかりと伝えることです。最初はわからないことだらけで、先生方に教わりながら仕事を進めていきます。忙しい中、時間をとって丁寧に教えてくださることに対する感謝は忘れてはいけないと思います。

教員になって、まだたった半年の私ですが、毎日本当に楽しく過ごしています。未曾有の事態の中で学校も少なからず影響を受けていますが、そんな中でも生徒と毎日会えることは幸せなことだと実感しています。採用試験の時の決意、そして今の気持ちを忘れず、今後も教員として成長し続けられたらと思っています。これから教員になるみなさんの教員生活も、おそらくかなり忙しく、しかし充実した日々だと思います。ぜひ、共に頑張っていきましょう。

突然の幕開けと怒涛の半年間

羽鳥 大我
(東京都公立高校英語科教員)

1 はじめに

「本日より原則自宅勤務です。」そう告げられた時、「教員の自宅勤務とは何か？」というのが率直な感想だった。実際に、自宅勤務期間が始まり、自宅で仕事をするのは良いが、顔も名前も、そして学習レベルも未知である生徒に向けて、どのような授業を作ればよいのかと頭を抱えた。いま改めて思い返してみると、生徒像を掌握していない中で授業構想を練ることは極めて不可能に近く、難しい時期を過ごしていたのだと思う。そしてその時に、やはり教職は生徒ありきでしか成り立たない職業であるのだと身をもって痛感した。

2 自宅勤務とは？

はじめに、「教員の自宅勤務とは何か？」と述べた。単刀直入にいうと、私は教員として自宅勤務期間中に何をすべきか全く分からなかった。休校期間中、生徒の学習を補填するための課題は各科目の主担当の先生方が作成した。分掌柄、休校期間中の仕事はほとんどなかった。教材研究をするにしても、いつ再開するかもわからない、生徒の様子もわからない、他の先生方がどのように授業を行っているかもわからないとなると、何を指標として授業をデザインすればよいか分からなかった。その為、行っていたことと言えば、教科書を読み込んで再開後にどのように授業をするか概括的に構想を練ることや、自己研鑽のために単語帳や文法書を再読するなどであった。

3 学校再開、怒涛の日々、出会い

1カ月の休校期間を経て、6月の3週目ごろに学校が再開した。その2日後には、教員として最初の授業を行った。その後は見出し通り、怒涛の日々だった。週16コマの授業準備に加えて、全面的に中止となった初任者研修の代替課題、会議資料の作成方法や教務手帳の使い方などの基本を覚えること、そして部活動とやらねばならないことは山積みだった。慣れない環境で、やらねばならぬことが山積みになった時に一番初めに疎かになったことが、授業であった。

毎日部活動を見た後に、授業の準備を行うのだが、当時は凝ったプリントやスライドを使用することが良い授業の絶対条件であると考えており、ほとんど毎日夜

遅くまで授業準備をしていた。しかし、ある先生との出会いによって、その考え方が徐々に変化していくことに気が付いた。その先生はこうおっしゃっていた。「プリントなどはあくまで授業を補助するものであって主役ではだめ、主役として使いすぎると教員も生徒もそれに頼り切ってしまうものよ。」たしかに当時を振り返ると、教員はプリントやスライドが完成したら満足、生徒はそれがあからそれだけに組み込んだら満足という状態に陥っていたと思う。しかし、授業の本番とはあくまで授業中であって、プリントを作成しているときではない。その本質に気づいてから、ようやく教具に頼り過ぎない授業ができるようになってきたと思う。まだまだ、授業の内容は改善していく必要があるが、このような授業の本質的な部分に1年目に気がつくことができたことは本当に大きな収穫であった。現在も試行錯誤しながらではあるが、以前よりも余裕をもって授業を行うことができている。

4 テスト作成に四苦八苦

学校が再開し、最後に待ち受けていた壁が定期テストの作成であった。教員になる以前は「テストなんて、教科書とワークの問題を切り貼りすれば良いだろう。」と思っていたが、実際はそうではなかった。切り貼りが悪いわけではないが、最も大事なことはテストポイント、つまり生徒をテストしたいポイントがテスト問題において明確になっているかどうかである。

また、定期テストとは今まで教員が生徒と行ってきた授業の内容を、生徒がどれくらい理解しているかを確認する場である上に、教員がどれだけ生徒が理解できる授業を行えたかを確認する場でもある。つまり定期テストの平均点は100点を目指さなければならないのだ。これらを考慮すると、定期テストを作成するのに時間はいくらかけても足りないことがわかる。初めてのテスト問題には2週間ほどかかった記憶がある。

5 さいごに

最後にはなるが、新型コロナウイルスの影響により実際に現場で仕事をした期間は半年ほどではあるが、短い期間で様々なことを経験することができた。慣れない環境で働くことの大変さ、生徒とよりよい関係を築くことができた喜び、授業が上手くいった時の達成感など数えきれないほどだ。教職のみならずどんな仕事でも、大変さや楽しさは混在していると思う。これから教職の道へ進もうとしている人もそうでない人も、辛いことばかりじゃなくてどうやって面白さを見つけるかに尽力してほしい。

コロナ禍のなかの教員生活

原 さくら

(東京都中高一貫私立校社会科教員)

1 はじめに

私は 2020 年 3 月に法政大学文学部を卒業し、東京都内の中高一貫の私立学校に社会科の教員として就職しました。私が就職した学校も、例に漏れず新型コロナウイルスの影響により、4 月から生徒は登校することもできず、私たち教員も週数回しか出勤できない日々が続きました。その後、6 月からの分散登校を経て、現在は生徒を目の前にした通常授業を行うことができます。4 月からの数ヶ月間ではありますが、実際に学校に勤める中で、様々な課題や困難にぶつかり、それと同時に多くの喜びを感じることができました。本稿では、コロナ禍という前代未聞の大混乱の中で始まった、私の教員生活を紹介したいと思います。

2 オンライン授業での苦勞

本校では、4 月から 6 月にかけてオンラインを活用した授業が行われました。しかし、校則や設備の関係から同時双方向型の授業ではなく、オンデマンド型の授業が行われたため、生徒と意思疎通を図ることが非常に困難でした。特に、本校では各学年の約 25%が帰国生で、あまり日本語が得意ではない生徒も多数在籍しています。現在担当している中学 1 年生の段階では、その傾向が特に強く、言葉が通じないためにやるべき課題がわからないということが様々な科目で発生しました。写真や文字を使って、何度もわかるようにメッセージを送り続けましたが、その度に直接ものを見せながら話せないもどかしさを感じました。

不便が多かったオンライン授業でしたが、このような状況の中でも、提出物の余白に「この課題が楽しかった！」など、感じたことを書いてくれる生徒がたくさんいました。通常の授業時とは異なり、毎授業膨大な量の課題を採点しなければならないため、とても大変でしたが、生徒とコミュニケーションをとれる採点の時間は、私にとって次第に心の支えになっていきました。(ちなみに、特に評判の良かった課題は、中国の産業の分野で行った、家にある洋服の産地を調べてみようという課題でした。中国や東南アジア産の洋服が多く出てくると予想していたら、イタリアなどヨーロッパ産の洋服がたくさん出てきたことが衝撃でした。)

3 対面授業での喜び

6 月から分散登校を経てようやく対面授業ができるようになりました。初めて生徒の前に立ち、授業をする前日は緊張でなかなか眠れなかったのを今でも覚えています。授業時間になり教室に入ると、これまで文字のみでやり取りをしていた生徒とやっと顔を合わせることができたという喜びが溢れてきました。生徒も同じだったようで、こちらが驚くぐらい目がキラキラと輝いていたのがとても印象的でした。その時に行った授業は、今の授業よりもずっと拙かったと思いますが、私の中で 1 番と言っていいくらい印象に残っている授業です。

現在は、様々な規制が緩くなり、グループワークを取り入れた授業が行えるようになりました。パレスチナ問題の発端であるイギリスの「三枚舌外交」を理解するために、ジグソー法を取り入れた授業を実施するなど、どのような学習方法が生徒にとって理解しやすいのか、試行錯誤の日々です。しかし、教育実習の時はじっくりと授業準備をする時間がありましたが、なかなかその時間を取ることができないのが現状です。限られた時間の中で、よりよい授業を作るために、もっと自分の中の知識を蓄えないといけないと痛感しています。

4 おわりに

コロナ禍の最中に始まった教員生活は、もちろん大変なこともありました。それ以上に多くの喜びや楽しみに出会えた期間でした。特に、オンライン授業の期間は、生徒と必要最低限の会話しかできませんでした。通常授業が始まってからは、授業中はもちろん、授業前後に生徒と他愛もない会話ができるようになったことが、1 番嬉しかったです。コロナ禍を経て、このような何気ない時間がとても幸せなことだと強く感じるようになりました。

現在中学 1 年生は世界地理を勉強していますが、帰国生はそれに関連して自分が暮らした国の話をしていくことが多いです。教科書に載っていない現地の暮らしの様子は、とても新鮮で新たな発見に溢れています。帰国生の経験をもっと授業に活かせたら、一般生にも世界がより身近になると思いますが、なかなかそのような授業が実現できていません。もっと精進を重ねて、日本語が得意ではない帰国生も、海外生活の経験が少ない一般生も世界について興味をもてるような授業を展開していくことが今後の目標です。

「武藤先生」誕生。

武藤 みのり
(千葉県公立高校国語科教員)

1 教員は、まず授業

この言葉は私が指導教諭や研究授業後の指導で多くの先生方から言われた言葉です。最終的に、生徒は学校で学んだことを一人でできるようにならなければいけません。そのために、生徒にどのような力をつけさせたいのか、その見通しをもって授業を組み立てなければならないと指導されました。それまでは、その時間の授業の計画を立てることで手一杯で、最終的な目標を私は考えていませんでした。それこそ、教科書「を」教えることに捉われていて、授業内容も、生徒が作業するよりも、私が説明する時間の方が長く退屈なものになってしまっていました。教科書「で」生徒に身につけて欲しい力を示して教えることが、生徒の力に繋がるのだと言われ、今までの授業内容を振り返り恥ずかしさと後悔を感じました。また、私自身、生徒の持つ力を信じられていなかったとも気付いて、申し訳なくなりました。わかる授業によって、生徒との信頼関係を築くことができれば、教育相談や生徒指導の基盤にもなります。より多くの生徒が理解しやすい授業のために、日々学び、授業方法を模索し続けています。

2 VS コロナウイルス

ようやく今はマスクや消毒の徹底のもと、学校生活を再開できていますが、現任校に赴任し、始業式を終えてすぐに二ヶ月の休校期間に入りました。まだ顔も覚えていない生徒たち、閑散とした教室や昇降口の姿に正直肩を落としました。コロナウイルスが学校生活に落とした影は大きなものです。行事や部活動の大会が中止になり、何より生徒の表情や言葉を拾いきれないのが悔しいです。しかし、突然奪われた日常に戸惑う生徒たちを支えることは私たち教員にもできると思います。私自身も不安はあるけれど、制限のある中でも生徒が悩みを乗り越えて、思い出を一つでも増やせるように隣で見守っていきたいです。

3 初めて担当する部活動は・・・

現任校に赴任した私は、女子硬式テニス部の主顧問になりました。高校生の時に部活動の経験があったため、希望の部活動の顧問になることができほっとしたと同時に、突然の主顧問に不安を感じたことをよく

覚えています。その不安は的中し、いざ部活動に行ってみると、二、三学年間の連携がまるで取れていない状態でした。あまりコミュニケーションもなく、三学年はコート整備をし、二学年は指示を待って動けないというように学年間に分厚い壁が立っていました。雨の日は練習場所がないため休みで、周りの先生からも緩いと評判の部活動だったのです。それからは、今後主学年として部活を率いていく二学年とは特に、密にコミュニケーションをとりました。部活動の内容も、練習メニューを部長、副部長と相談し、地区内の高校とも練習試合を組みました。すると、生徒たちはメキメキと力を伸ばし、去年まで大会一、二回戦負けだったのが、なんと早速県大会出場を果たしました。大会前にある生徒が、「私が先生を県大会に連れて行く」と言って実現してくれたことを、きっと私は今後一生忘れられません。この経験を持って、生徒たちが成長できる環境を私たち教員がつくることの大切さを学びました。私が来る前のテニス部は学びに飢えていたのだと思います。改めて、生徒自身が自らの力を伸ばせるかは、周りの教員にかかっているのだと気付かされました。指導して下さる外部コーチや、練習試合を組んで下さる恩師などがいたこと、何より素直で一生懸命な生徒たちに囲まれている私は本当に幸せです。その感謝を伝えるためにも、主顧問として、また、現任校の教員として周りの先生方や生徒たちと真摯に向き合い、努めていきます。周りの先生は、「自分の部活動を作り上げるまでに三年はかかる」と言っていました。練習を見ていると、休憩と練習の間のメリハリや、学年間でのやりとりなど、まだまだ改善の余地があります。初任校なので、私が現任校の女子硬式テニス部の顧問でいられるのは最長五年間のみですが、その中で私なりのルールや譲れない部分を一人でも多くの生徒たちに伝え、私が安心して他校に異動できるような頼もしいテニス部へと磨き上げていきたいです。

4 おわりに

生徒を「教え、育てる」ことが私たちの第一の仕事ですが、生徒たちから学ぶことは数え切れません。日々の中で、出来たことを喜ぶよりも、出来ないことを悔いることの方が多いです。しかし、私たち教員が悩む原因も、またそれを喜びに変えてくれるのも全部生徒です。この一年間は授業のスタイルや私が大事にする考え方を固める第一歩だと思っています。そのためにも先輩の教員方の授業を見たり、話し合ったりして私の素材となるものを蓄えていきます。憧れの職業に就けたことはゴールではなくスタートです。これから「武藤先生」として様々なことに努め、挑戦し続けます。

困難を経験に

長澤 祐介
(神奈川県公立高校英語科教員)

1 はじめに

今年度4月に神奈川県・高等学校・外国語英語科として採用された長澤と申します。新型コロナウイルス感染症に伴い、難しい教員人生1年目を過ごしています。学生時代大変お世話になりました教職課程センターでは各種講座等をオンライン上で実施しているということで、教師を目指す学生の皆さんも苦しい状況下で奮闘していることかと思えます。例年8月に開催されている「法政大学若い教師の集い」が中止となってしまったため、恐縮ではありますが新人教師を代表して「新人教師の奮闘記」として文章を寄稿させて頂けたらと思います。

2 新型コロナウイルスの影響を受けた教員生活

教員として働き始めたのも束の間、最初の数ヶ月は生徒をほとんど見ることなく過ぎて行きました。初めての業務は生徒への学習保障を目的とした授業動画の作成・配信でした。新人教員はもちろん先輩教員の方々も経験が無いことでしたので、一体となって取り組んだのが今となってはもう遠い昔のことのように感じられます。それから学校が徐々に再開され、ようやく生徒が学校に登校できるようになったと同時に想像以上に忙しい日々が始まりました。私は3年次の進路・キャリア支援グループに所属していますが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響もあってか例年と比べ3倍の生徒が就職を希望するという状況でした。この時に新型コロナウイルス感染症が社会に与える影響の大きさを改めて痛感しました。そのような状況下でグループ業務をゆっくり覚えている余裕はなかったため、授業時間の合間や昼食の時間、放課後の時間を全て費やし、企業との会社見学等に関するアポイント取りを行い、生徒対応に追われる日々でした。記憶が正しければ30社ほど連絡を取り合っていたかと思えます。並行して授業準備・定期テスト・その他のグループ業務も同時に行っていたため、もともと体力には自信がありましたが、あまりの業務量に疲弊し、数ヶ月体調を崩したことは自分でも驚きました。周りの先生方も相当に心身ともに疲れ切っていました。貴重な生徒の時間が削

られてしまったことに加えて、教員もしわ寄せに苦しんだ日々だったと思います。生徒が安心して学校に通えるよう、一刻も早く終息する事を願って日々の業務に取り組んでいます。

3 学んだこと

この経験から私が学んだことは、「日々学び続ける」ということです。学生時代にもよく耳にした言葉ですが、この言葉の意味を痛感できました。一度教育現場に足を踏み入れれば、新人だからというのは一切許されません。生徒のために学び・考えることが常に求められます。また、学んだことを実践で試すことで多くの発見を得ることができます。この経験を胸に日々成長して行きたいと思えます。

4 現在、教師としてやりがいを感じていること

教師として特にやりがいを感じていることを最後にお伝えできたらと思います。私は特に教科指導に力を入れたいと思っているため、毎回の授業に向けていろいろな参考書を読みアイデアを出し準備をして行きますが、生徒は素直なもので、彼らの興味関心を引き出すような授業であれば積極的に目を輝かせながら取り組みますが、そうでなければぼっーとして授業を受けています。その反応を見て彼らがもっと夢中になるにはどうしたらいいのかと試行錯誤を続け、授業が充実した雰囲気が終わったときには自分自身のモチベーションになります。高校卒業後の生徒の進路は様々で、進学できる生徒もいれば家庭の事情を考慮しすぐ社会に出て働き始める生徒も少なくありません。そのため英語学習が高校で最後になる生徒もいます。彼らが高校での学びを振り返った時に「英語の授業をまた受けたいな」と思ってもらえるような授業を目指して努力を続けて行きたいと思えます。

初任者が感じる教員の苦楽

福島 大希

(岐阜県公立中学校社会科教員)

1 はじめに

今、私は岐阜県の中学校教員として日々を送っています。今回は実際、教員になってよかったなと思うこと、大変だと思うことについて書きたいと思います。

2 よかったこと

まず、よかったことについてです。1つ目は『子どもたちの成長に日々携われること』です。それを感じたのは一年生の女子生徒の成長です。本校では、授業開始2分前に教科係が問題を出し、知識を増やす授業前学習を行っているのですが、入学当初、内気な性格のその女子生徒は前に立って授業前学習を行うのが難しい状況でした。しかし、一緒に問題を考えたり、聞く側の姿勢を整えたりすることで、徐々に自信を持って行うことができるようになってきました。最近では、授業前学習を行う際にどの問題を出したらみんなのためになるのかなど、自らが考えていることを相談するようになりました。これは、大きな成長だなと感じます。このような成長が生徒の数だけ感じることができます。その変化が今後の人生にどう生かされるのかを考えると、楽しみでしかありません。成長を促す教員の役割としては、生徒の行動に対して価値づける必要があります。そのため、具体的に何がよかったのか、こうすればもっと良くなることを伝え徐々に成長していく様子を見届けなければなりません。そのために、子どもの小さな変化に気づく目をもっと養い、子どもが自らの力で成長できるようにしたいと思っています。

2つ目は、『自分自身の人間としての成長ができること』です。人は誰しも自分に甘いところがあると思います。私にもあります。しかし、教育現場では教師は常に生徒の見本でなければなりません。そのため、自分の行動を見直す機会が多くあります。例えば、言葉遣いであったり、普段「継続することが大切だよ」と生徒に対して伝えているのに、「自分は何か継続していることはあるのかな」と自分の発言に説得力はあるのかと考えたり、自己を見つめることができます。これは、常に未来を担う子どもに見られている環境だからこそできることだと私は思います。一方で、生徒の様子からも学ぶことも多いです。様々な環境で育ってきた子どもがいますので、人間としての強さや、生き抜く考え方もつ子ども、自分の目標に対して果敢に挑戦し続ける姿

からは、多くのことを学ぶことができます。

3つ目は、1日の多くの時間が笑顔でいられることです。これは人によって認識が違いますが、生徒との何気ない会話や、授業中、職員室、多くのところで笑顔が生まれます。常に人との関わりを必要とする職業だと思っていますので、必然的に円滑な人間関係の構築ができる人が多いためかなと思います。笑顔でいることは、よい雰囲気ができ、学ぶ環境としては最適だと思いますので教育現場においては大切だと思います。また、笑顔でいられること自体幸せなことですので、教師になってよかったなと思える理由の1つです。

3 大変なこと

良いことがある一方で大変なこともあります。1つ目は、今の状況だと労働時間が削れないことです。初任ということもあり、日々授業準備は欠かせません。しかし、自分の準備ができるのは定時の16時40分が過ぎてからです。そのため、基本的に19時頃退勤しています。そもそもの教員の人数が足りてないことに加え、仕事量が多すぎると大学生の頃から知ってはいましたが、身をもって感じています。私は、多趣味ですので平日でも色々やりたいことがあるのですが、なかなかできていないのが現状です。私は土日出勤しないようにしていますが、出勤している同僚の教員も多くいます。2つ目は、1つ目の内容にも関わりますが、一人一人やらなければならないことが多いために、助言をもらう機会があまりないことです。先輩教員は学年主任や学級担任、教科主任、部活動顧問など様々な役割を背負っています。そのため、私の仕事において関与することが少なく、「これでいいのかな」と不安になることがあります。特に、授業に関してはいきなり一人で生徒の前に立ち授業を行うので、先輩から勉強する機会が多くあればなと思います。上記の2点は自分の要領を良くすれば解決できることもあると思いますので、改善したいと思います。

以上が、教員になって良いことと大変なことです。大変なことはありますが、私自身は教員になってよかったと思います。一緒に苦楽を共にして向き合った生徒たちとの関係は、中学校三年間では終わりません。生徒たちの人生に大きく関わることになりますので、その先も続きます。いつまでも、「先生」と呼ばれる職業は教員だけだと思います。本当にやりがいがあると思います。これからもこの初心の気持ちを忘れずに、日々努力していきたいと思います。貴重な時間を割き、お読み下さいましてありがとうございました。